

特集「新しい戦争の考古学」によせて

松木 武彦*

ヒトが入れ子状に複合化した巨大な群を作っていく際に生み出される事象として「戦争」がある。これからの戦争の研究は、従来の征服史観で強調されてきた外向的・物理的側面だけではなく、戦争が集団内の社会関係を変える内向的・認知的側面を重視すべきである。そのことによって戦争が社会の複合化を促したメカニズムを新たな視点から解明するための起点に立つことを、本特集の目的とする。具体的には、「出ユーラシア」の諸地域である日本列島および北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカの各先史社会における戦争の過程を比較し、集団の複合化と戦争の双方向的で多様な関係を探るための基礎的データを提示する。

キーワード

戦争、認知考古学、比較考古学、出ユーラシア

* 国立歴史民俗博物館／総合研究大学院大学

ヒトは、入れ子状に複合化した巨大な群(民族・国家など)を生み出すという、他の生物種にはみられない特異なプロセスを踏んで今日に至っている。このプロセスは、最終氷期が終わり、植物資源に多くを依存する集住が始まった時から本格化するが、そのメカニズム自体はヒトが長い進化の末に獲得した心と身体の形質の中に内在していたと考えられる。どのような環境との相互作用がこのメカニズムの発動にスイッチを入れたり、促進したり抑制したりするのであろうか。

このメカニズムとプロセスを「戦争」という事象を通じて解明するために、考古学と人類学からなる研究プロジェクト「集団の複合化と戦争」(松木武彦代表)が、新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学」(松本直子代表)を構成する計画研究の1つとして、岡山大学・南山大学・国立歴史民俗博物館などを主要な拠点に2019年度に発足した。本特集は、このメンバーによる第一次の中間報告を集め、研究全体の今後の指針と、考古学による戦争研究の新しい視点を示したものである。

考古学による戦争研究は、日本では1970-80年代に佐原真が本格化させた。佐原は、戦争の考古学的「証拠」として「武器」「受傷遺体」「防御施設」「武器副葬」「武器崇拜」「戦争を表した芸術」の6つを挙げた。その上で、国際的な関連研究の成果を渉猟し、農耕を始めた新石器時代以降にそれらが顕在化する点から、戦争は、農耕生産による富の争奪から生じた、人類にとって後天的に取得された文化とみなした。国際的には、このような考え方は、20世紀の間は、戦争の起源がヒトの生得的な攻撃行動にあると考える諸説と対峙していた。

しかし、21世紀に入る頃から、後者の考えが、ヒトそのものの生物学的な解明の進展とともに、佐原ら前者の考えに対してしだいに優位に立ち始めた。ヒトの認知・行為の生物学的な由来と発達の過程が進化行動学や認知心理学の視点で解明されるようになり、ヒトの生得的攻撃行動と戦争との関係について、より科学的な説明が行われるようになった。同時に、戦争の発生や持続の要因も、富の争奪、資源欠乏、人口圧増加のような経済的条件のみで説明されることが少なくなり、認知的・文化的条件の比重を高めた説明が増えた。さらには、強勢な集団が劣弱な集団を武力で征服・支配することを通じて社会が統合されるといった「征服史観」がストレートに語られる機会はほとんどなくなり、戦争と社会との相互関係の多様な局面が注

目されるようになってきた。

このような視座から、戦争が社会の複合化を進める(あるいは進めない)プロセスとメカニズムを、考古学の方法で新たに復元する機運が高まっている。戦争には、「征服史観」で過度に強調されてきた外向的・物理的側面のみならず、戦争という状況の演出を媒介として集団内の社会関係を操作する内向的・認知的側面がある。具体的にいうと、戦争は単なる暴力行為・武力行動ではなく、自集団中心主義の表出、自集団内でのアルトウルイズム(利他主義)の誇示(自己犠牲行為等)、集団アイデンティティの強化、ジェンダーの類型的演出など、戦争はさまざまな文化要素のコンプレックス(複合体)としての姿をとることが認識されつつあり、戦争という単独のコンテクストだけで戦争を理解することはもはや不可能といえる。本プロジェクトはこの点を重視し、ヒトの認知と身体が環境との相互作用のもとでどのようにして戦争という事象を生み出し、それを軸とする認知と進化のいかなるメカニズムが社会の複合化を可能としたのか(しなかったのか)を解明することを目的とする。

そのためにまず、文明形成期の各地の戦争の実態を析出する作業が必要である。本研究が対象とする「出ユーラシア」後の文明形成地域であるアメリカ大陸およびオセアニアでは、戦争に関するデータと成果の蓄積が進み、日本列島の戦争も含めて相互比較することで、文明形成期における戦争という現象の普遍的特性を抽出できる準備が整っている。本特集では、日本列島について寺前直人・藤沢敦・松木武彦が上記の視座を強く意識しながら、時間的には弥生時代から古墳時代にかけて、空間的には列島の中央部(九州・中四国・近畿・中部および関東地方)および北部(東北地方)の戦争の具体的諸相を明らかにする。また、アメリカ大陸については佐々木憲一(北アメリカ)、市川彰(中央アメリカ)、渡部森哉(南アメリカ)が、既往の研究を概観した上で、それぞれの地域の先史時代の戦争の実態を描写する。また、戦争という事象の基幹をなす考古資料としての武器と戦闘については、岡安光彦が焦点を当てて具体例を検討している。

ここで提示するこれらの論考をもとに、出ユーラシア後に文明を創出した各地で、戦争コンプレックス形成と社会複合化のプロセスとメカニズムを、今後は具体的に復元・提示していく。この作業は、冒頭で述べたように、ヒト特有の巨大で複合的な「群」と、その存続を支える意識や知や感情の共有が、暴力という身

体の行為を媒介としていかに相互に作用し合うかを解明する役割を担う。このことによって、集団の複合化と戦争の相互で多様な関係を軸に、そのプロセスとメカニズムを明らかにすることを目的とする。

戦争や国家形成は、これまで長い研究史においては、人類が後発的に取得した文化現象と理解されることが多く、ヒトの本質の表現型とみる視点はきわめて希薄であった。そのため、ヒトの本質の科学的追究とは無関係に、ともすれば戦争や国家を善悪の視点や

好悪の感覚のみで評価する姿勢が研究にも仄見え、学問的正しさとは別の政治性や哲学性を帯びたり、そのために昨今の社会に受け入れにくくなったりしたことは否定できない。本研究は、そのような政治性や哲学性から解放されたニュートラルな科学的視点から、あらためて戦争や社会の本質を洞察し、人類の未来に照らしてそれらに対する認識を刷新する可能性をもっている。本特集が、このような可能性を拓くステップとなれば幸いである。

A Comment for a New Method of Archaeology on Warfare

Takehiko MATSUGI*

Warfare is one of the principal phenomena that emerges in human history in the transition from simple egalitarian groups to complex and hierarchical social groups. Anthropological and archaeological research on warfare needs to be based more on cognitive analysis of intra-group relationships of societies under conflict rather than on the traditional interests in intergroup interaction, such as battles, conquests, and military domination. By the cognitive analysis, we aim to achieve a perspective for further investigation on the processes and mechanisms of warfare that promote the formation of complex societies.

Specifically, we will compare the processes of prehistoric warfare and social complexity among North-, Meso-, and South America as well as the Japanese archipelago to find a methodology for a comprehensive study of the interactive and diversified relationships between increasing social complexity and warfare.

Keywords

warfare, cognitive archaeology, comparative archaeology, out-of-Eurasia

* National Museum of Japanese History /
The Graduate University for Advanced Studies